

道南と加山雄三

渡島医師会
新都市砂原病院

たかだ ごうた
高田 剛太

2年前に空知にある病院を定年退職となり、その後ここ道南は砂原町（現在は森町に合併）にある90床位の病院で働いている。砂原町のことは実はよく知らなかったのだが、海辺の町に住みたいという気持ちは昔から持っていた。それはたぶん子供の頃から憧れていた、加山雄三に対する想いがあったからであろう。昭和30年生まれの子供にとって、小学校5、6年頃にテレビで見た加山雄三は衝撃的であった。日焼けした端正な、そして少し野性的な顔立ち、スリムで引き締まった身体、ギターを持って歌うその姿は、まさにアポロ像のようであり、私の心を虜にした。

それ以来私の人生の目標は「加山雄三になること」であった。中学でギターを買ってもらった。しかしコードを4つ弾けるようになって、壁にぶち当たった。それ以上の複雑なコードが上手く弾けないのである。それでも歌を作って、ギターを弾きながら歌えなければ、加山雄三にはなれない。詞は書いたこともないので、1学年下の少し可愛い女の子に頼んで書いてもらった。それに4つしか弾けないコードのメロディーをつけて、何とか1曲作ろうとした。「さようなら その言葉が とても悲しい」そんな歌詞であった。しかしコード4つでは苦しい。曲は未完のままに終わった。もっとギターが上手であれば、きっと昭和の名曲となったであろう。

ギターは諦めたが、加山雄三はそれだけではない。「若大将シリーズ」の中でも、色んなスポーツに挑戦している。陸上、アメフト、スキーなどなど。スポーツ万能じゃないと加山雄三にはなれない。元々私は足が速くて、中学・高校は陸上部で、子供の頃から野球も結構上手だった。大学ではサッカー部だった。水泳も得意だ。しかしスキーは駄目だった。高校まで埼玉だったから、一度もやったことはない。北大に入ってから誘われて何度か滑ったが、全く駄目だった。おまけに安いスキー板だったから、藻岩山のギャップで真っ二つに折れた。心も折れた。もう二度とスキーはしないと決めて、10年以上過ぎた。ある夜加山雄三が夢枕に立った（まだ生きてるけど）。「お前はスキーを諦めたのか？ それじゃあオレにはなれないな・・・」それから三日三晩寝ながら考えた。当時外科医になって10年目位で、毎日とても忙しかった。娘が3人いたのでスキーにも連

れていったが、相変わらず自分は下手くそで、札幌生まれの妻が子供たちを教えていた。父親としてこれではいけないと思った。自分が一番上手になって、子供たちに教えてやらなければ駄目だと思った。当時30代後半で、やるなら今しかないと思った。忙しい外科医などやってる暇はない。職場を変えた。

〇〇急病センターで夜間働きながら約10年間、夏は登山、カヌー、自転車、バイク、サッカー、冬はスキーと遊びまくった。元々ひねくれ者で、他人に教わるのが好きではなく何でも自己流なので、スキーもなかなか上達しなかった。それでも手稲山のシーズン券を買って、毎年40回以上滑った。少しずつ上手になってきた。昔スキー検定2級の人と、準指導員の人と一緒に滑ったことがあり、その中間位だったので、自称1級である。現在は67歳で、年に10回位しか滑らないが、毎年技術は向上している。まだまだ筋力は維持されていて、元々バランス感覚はいい方なので、整備されたゲレンデよりは、あまり他人が滑らないコースの端の方の、ぐしゃぐしゃした所が得意である。大分加山雄三に近づいてきた。

そして最後のポイント。加山雄三になるためには、海辺に住まなければならない。加山雄三は湘南・茅ヶ崎生まれの、生粋の湘南ボーイである。私が今住んでいるのは、砂原町の隣の鹿部町である。ここに鹿部リゾートという別荘地があり、事務長が借りてくれた大きな家に妻と二人で住んでいる。周囲は深い森で、風呂も温泉で申し分ない。朝は小鳥の囀りで目を覚ます。職場まで車で15分だが、途中で看板があって「北海道の湘南」と書いてある。「おお、ついに自分も湘南ボーイ（オジサン）になった」と感激する。しかしながら海まで歩いて10分ではあるが、家から海は見えない。やはり家から海が見えないと加山雄三にはなれない。そこで最近函館・湯の川温泉に中古マンションを買った。7階のベランダからは津軽海峡の海が見える。それを眺めつつ、ビールを飲みながら、そっと呟いてみる。「幸せだなあ。ボクもやっと加山雄一くらいになれたかな。ありがとう雄三さん」